

地域課題に対応した市民講座プログラム開発・改革に関する研究

—古賀市コスモス市民講座サポーター養成講座による取組み—

古市 勝也¹⁾, ブストス・ナサリオ²⁾, 伊地知 隆作³⁾
吉永 春男⁴⁾, 力丸 宏昭⁴⁾, 樋口 武史⁴⁾, 山本 節子⁴⁾

The development of an academic program for community problems

—The training of supporters citizens in Koga City's "COSMOS" lectures—

Katsuya FURUICHI¹⁾, Nazario BUSTOS²⁾, Ryusaku IJICHI³⁾
Haruo YOSHINAGA⁴⁾, Hiroaki RIKIMARU⁴⁾
Takefumi HIGUCHI⁴⁾, Setsuko YAMAMOTO⁴⁾

1. 緒言

今、学習者たちが自らの学習を企画する段階にきている。市民たちが自ら地域の学習講座を企画・立案したり、イベントを企画・実施したりする事例が多くなっているのである。なぜ、このような「市民が頑張る現象」が出てきたのか。市民が企画立案の段階から自主的活動をするようになるには、どのような発展段階があるのかを明らかにする必要がある。

まず、社会の動向に目を向けてみよう。今、市町村の講座の改革が求められている。改革は何時の時代でも必要である。では、なぜ今、市町村の実施する講座の改革が必要だろうか。大きく2つの理由が考えられる。その切り口は一つには、行政の側と市民（住民）の側からの視点である。二つには「カネ」と「ヒト」の視点である。すなわち、近年の行政は財政再建を迫られており、財政的に「無い袖は振れない」逼迫した状態であり、予算削減が行政内で全庁的に行われている。行政の関係施策事業費の削減、人件費の削減の原

因はここにある。

このような現状の中で、一方の住民の側から見ると、地域には、自主的活動ができ、行政施策への協働活動ができる「素晴らしい人材」がいるということである。特に、いわゆる、「敗戦後の経済大国日本を築いてきた」といわれる、団塊の世代が定年を迎え地域に回帰してくれることが期待される今、地域の人材活用が求められているのである。また、生涯学習の視点から見ると、我が国の生涯学習の推進施策により、学習し、その学習の成果を積み上げた人たちの活用がポイントである。すなわち、学習の成果を積み上げた人たちが、その成果を「仕事や自分のキャリアアップ」「ボランティア活動」「地域貢献活動」に活かしたいと思う人が増えているといえよう。今や、地域には多様な人材が存在するのである。そこで、学習で成果を積み上げた人たちを活用した地域課題の解決プログラムの開発が求められるのである。

さらに強調したいのは、約60年ぶりに改正された「教育基本法」の前文において「・・・公共の精神を尊

1) 九州共立大学
2) 桜花学園大学
3) 環境とエネルギー研究会
4) 古賀市教育委員会

1) Kyushu Kyoritsu University Faculty of Sports Science
2) Ohka Gakuen University
3) The Society for Environmental Research
4) Board of Education, Koga City

び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期する・・・」が加えられたこと。また、その「教育の目標」に「3・・・公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う」が加えられ、まさに、「公共」を担う人材の育成と活用が求められるのである。

本研究は、福岡県古賀市の「コスモス市民講座スタッフ（サポーター）養成講座」において、筆者が企画の段階から、行政担当者や市民実行委員のメンバーとともに協働した実践的研究であり、その企画・実施過程を時系列で検証する。そして、この講座は何を求めて企画立案したか、その背景は何か、講座の実施過程の成果と分析、今後の展望について論述したい。

2. 古賀市「コスモス市民講座スタッフ（サポーター）養成講座」の現状

古賀市では平成14年度より市民一般を対象にコスモス市民講座を実施している。平成20年現在7年目である¹⁾。この講座の特色は、市民サポーターが市民の生涯学習活動全般を推進するため、行政と協働してさまざまな学習プログラムを実施している。サポーター養成講座はまさにサポーターの養成による講座支援である²⁾。

1) 時代とともに変容・改善してきた市民講座

古賀市の市民講座は伝統がある。その源流は社会教育・公民館事業として実施されていた。（前担当者の荒川登志子氏と現担当者の山本節子氏の覚書等を基に概要を考察し、記録として残しておきたい。）すなわち、「成人学級（生き甲斐）＝茶道、華道、習字、詩吟、陶芸、民舞、民謡、フラワーアレンジ」や「成人学級（語学）＝英語、中国語、韓国語」、「女性大学（社会的課題の学習や視察研修）」、「高齢者大学（社会的課題の学習や視察研修、実習）」等である。社会教育や公民館が広く・多様な住民の趣味教養等の学習要求に答えていた時代であり、それが求められていた時代である。よって、参加者も多かったのである。

その後、平成12・13年度ごろから変革が求められてきた。それは、公民館事業の課題として「成人学級等は学習要求の高度化に対して初級・中級クラスに編成して実施し要望に応じてきた。その後、講座が継続し、実施年数が長くなると新規の受講生が5人未満になる教室が多くなってきた。そこで、自主運営を促し、自主サークルづくりをしてきた。」また「学習内

容での課題」としては、女性大学、高齢者大学それぞれに共通のテーマであるのに、運営は別々に行っていた。そこで、実行委員会制度のあり方などを考察し、統合する方向で事業計画を作成するようにしている。

その結果、平成14年度には、成人学級（いきがい）を見直し・廃止とし、大学事業の一体化を図った。すなわち、名称を「古賀市市民大学」座学と実習をプログラム化して生涯学習の理念化を啓発している。さらに、各大学の実行委員会を廃止した。古賀市市民大学の名称を「コスモス市民大学」に変更している。

（民間運営のヒューマンカレッジとの関係）。市民参画の公民館事業を目ざし「市民ボランティア募集」事業を立ち上げ、7人が応募している。この年「サポーター制度」を立ち上げている。

平成15年度には「コスモス市民大学」の名称を変更し、「コスモス市民講座」としている。この講座は、毎年募集するシステムで、単位制の学習システムにはしていない。

平成16年度には「市民共働のまちづくり」と「生涯学習によるまちづくり」を「コスモス市民講座」で展開している。ここでは、講座で学習したことを地域や子ども、高齢者に還元する循環学習の形態づくりをねらっている。

平成17年度は、課題として、講座の自主運営化を目ざし、受講料を「一般会計への歳入からスタッフ会への移行」を懸案としている。

平成18年度には、課題として、実習コースの自主運営のための役割分担制を組み、収支決算の報告会を実施している。

このような経緯を経て、趣味教養の分野は自主講座として発展成長し、平成20年度は、現在の「古賀市コスモス市民講座」の「講演会コース」（年11回）と、「実習コース」（6コース、各コース10回）になっている。

注目したいのは、この講座を支援する市民による「市民講座サポーター制度」は、平成14年度からスタートしている。

2) なぜ今、市民講座サポーターの養成か

ではなぜ今、市民講座サポーターの養成が必要なのか。そのねらいは「市民による講座のレベルアップ、市民による自立講座への段階的養成（乳離れ自立への支援）、市民による講座プランナーの養成」等である。

市民サポーターが関係の講座出身者であることを考えると、市民講座で育った市民が、今度は、自ら講座

のお世話役になり、さらに、講座の企画をするまでに成長したことになる。この発達段階に注目いただきたい。さらに、講座の企画に「学習の成果を地域活動に還元する」視点が待っている。古賀市では既に平成16年度に、講座で学習したことを還元する循環型学習の形態づくりをねらっている。

3) 市民講座の現状把握・診断

今年度の講座の企画に当たって、担当者と確認・把握したことは次の点である。

(1) 来年度へ向けて実習コースをどのように企画すべきか

「①体力と健康づくり」コース（約3年目）では、「野外ウォーキングのコースがマンネリ化している」「古賀市内を電車に出て新コースを実施すると参加者が少なくなる」との反省が出された。

「②「古賀と地域を知る」コース（約4年目）」では、「4年間も実施したので、古賀を知り尽くした感じがある。」「史跡等だけではなく、古賀の全体をと考えるがネタが難しい。」があげられた。

「③「親父の食と調理」コース（約3年目）」は、講座の時間が無く、料理の下ごしらえまでできない等の意見が出された。

「④「からだと言葉で表現しよう」コース（約3年目）」では「講師の意志は、市民劇団の基礎をしたいというものがあるが、年配の受講者にはその意識はない。若手の受講者にはその意識がある。受講者の意識にズレがある。」が出された。

「⑤「ものづくり・木工」コース（約4年目）」では「参加者の固定化」等がでている。

「⑥「カメラで表現」コース（1年目）」では、「参加者の技術や参加目的に格差」がある。

(2) 担当スタッフを入れ替えた方がいいのか

平成18年度→19年度は担当スタッフの変更を一部行ったが、19年度→20年度は変わっていない。2～3年は継続させる方向を示した。

(3) 講座スタッフの中に中心となるリーダーをどう育てるのか

今まで、スタッフの中心であったリーダーの参加が厳しくなり、現在はスタッフ活動を休止している。それまでは、スタッフ会議の司会等、そのリーダーが中心となり動いていた。現在は、YSさんが行っている。YSさんに負担がかかっている。

(4) ボランティアであるスタッフにどこまで要求できるのか

例えば、講師との交渉などは任せられるのか、自主運営に移行した際（NPO法人化を含む）に、本当に負担を感じずに運営に協力してもらえるのか。

(5) 実習コースについてのルール化（ある程度の）は必要なのか

コスモス市民講座の目的は、学んだことを地域に生かす・活用することである。それには、自主グループの活動も含まれる。実習コースについては、趣味のコースにはしないというルールがある。現状は、実習コースは何年までというルールはない。

4) 担当者の今年度の講座への要望

今年度の講座に対する担当者の要望は下記の通りであった。

① 今年度1月に実施予定である「市政シンポジウム」（講演会コース）の企画が難しい。その企画について教えていただきたい。

② 来年度の実習コースの企画について教えていただきたい。

③ 自主運営という方法が可能なのか、実現するために必要な考え方（スタッフが本当に取り組めるのかを含め）を教えていただきたい。

※ 以上の点について、ワークショップ形式等で取り組みたい。

3. 平成20年度「市民講座スタッフ」によるプログラム開発研修

1) 講座が目指したもの

古賀市では、今年度の講座の目的を「これからの生涯学習社会は、単に個々人の「趣味・教養」を充実させるだけのものではなく、地域や生活課題解決のための主体的に係わる人づくりが求められており、その為の一つとして講座を開設します。「学習に励み」「学習を楽しみ」「成果を活かし」ながら、生涯学習を推進し受講生一人ひとりが、さまざまな活動に係わり、より良い人間関係を築き、豊かで活力ある人づくりに資すること、さらに生涯学習に携わる市民の意識向上を図る」としている。講座の目指すポイントは、「学習に励み」「学習を楽しみ」「成果を活かす」である。

2) 「市民講座スタッフ」によるプログラム開発の企画の視点

次年度講座の講座企画に役立つ企画の改良と新規開発（グループワーク）をめざし、その市民講座企画の

視点・要点として、「市民ニーズを捉えたプログラム企画・改良」を手がけた。

特に、プログラム改良の視点（改良の処方箋）としては、一つは、①3年以上の講座の発展と改良の視点としては、「学び・学習した成果を地域に還元」「社会参加のプログラムを1コマでも入れてみる」とした。すなわち、「学習成果の地域還元」と「社会参加プログラムの導入」である。二つには、②市民のニーズに合った講座を新規に立ち上げ、公募する手法の導入である。三つには、③講座修了者を「自主学習グループ」に組織化する方向性の導入である。

3) 『コスモス市民講座スタッフ養成講座』プログラム案（表-1参照）

表-1：平成20年度高齢者はつらつ活動拠点事業地域ボランティア講座

古賀市『コスモス市民講座スタッフ養成講座』プログラム案			
日程・会場	研修内容	ねらい	担当講師
【第1回】 10/3(金) 8:25～14:00	「飯塚熟年者マナビ塾視察」 ・取組みの特徴と視察のポイントの理解	・実践的活動から学ぶ ・自主活動を学ぶ ・担当者との情報交流	九州共立大学 古市 勝也 教授
【第2回】 10/8(水) 19:30～21:00 市役所402 会議室	○開講式・オリエンテーション(10分) *日程説明、講座の目的について ○講義と演習(80分) 「シンポジウム企画」 課題：今年度1月に実施予定である「市政シンポジウム」(講演会コース)の企画	・研修目的の理解 ・市民協働のまちづくりを 全体的流れを学ぶ ・市政の重点目標は？ テーマ設定の参考	
【第3回】 10/15(水) 19:30～21:00 市役所402 会議室	○講義・演習(90分) 「市民ニーズを捉えたプログラム企画・改良① (市民講座企画の視点・要点) — 実習コース企画① —	・次年度講座の講座企画に役立つ企画の改良と新規開発(グループワーク)	#
【第4回】 10/22(水) 19:30～21:00 市役所402 会議室	○演習(90分) 「市民ニーズを捉えたプログラム新規開発② (市民講座プログラム企画作成) — 実習コース企画・開発② —	#	
【第5回】 10/29(火) 19:30～21:00 市役所402 会議室	○講義(30分) 「学びを地域に活かす活動とは」 (自主運営・NPO化への展望) — 自主運営に向けて — ○インタビューダイアログ(50分) 「楽しく！地域活動への挑戦」 ○閉講式(10分)	・プログラム作成の振り返り ・市民講座ボランティアの活動の可能性を考える	

4. 「市民講座スタッフ」によるプログラム開発の企画の実際

1) 第1回：まず、先進事例視察研修として、飯塚市「飯塚熟年者マナビ塾視察」を入れた。その、取組みの特徴と視察のポイントとして、①実践的活動

から学ぶ、②自主活動を学ぶ、③担当者との情報交流を掲げ実施した。

2) 第2回：講義と演習として、「シンポジウム企画」を課題とした。すなわち「今年度2月5日に実施予定である「市政シンポジウム」(講演会コース)の企画をした。

講義「市政シンポジウムの企画・立案」では、「市政シンポジウム」の意義として、①市民と行政の相互理解(学び・理解し・納得し・行動する)、②市政の理解、③市民の学習・理解・納得・行動について論考した。また、「市政シンポジウムテーマ選定の手法」として、①古賀市の平成20年度の重点施策からの選定、②古賀市の意識調査(市民の要望からの選定)、③スタッフによる直接「市長インタビュー」からの選定、④コスモス市民講座のアンケートからの選定(古賀の財政、予算、環境問題、公園、都市公園整備、交通体系、バス問題、古賀市マップ作り・観光、古賀市の文化・史跡案内ボランティアなど)の視点を提言した。さらに、引き続き、①登壇者の候補推薦、②登壇者の決定をした。また、演習(グループワーク)では、①シンポジウムプログラム作成、②ちらし作成の手順を示し実践した。

3) 第3回：講義・演習として、「市民ニーズを捉えたプログラム企画・改良①(市民講座企画の視点・要点)」を掲げ、次年度講座の講座企画に役立つ企画の改良と新規開発(グループワーク)実習・企画した。

「実習コース企画」では、テーマとして「平成21年度へ向けて実習コースをどのように企画すべきか」を掲げ、まず、下記の平成20年度の講座の現状診断をした。すなわち、①「体力と健康づくり」コース(約3年目)、②「古賀と地域を知る」コース(約4年目)、③「親父の食と調理」コース(約3年目)、④「からだと言葉で表現しよう」コース(約3年目)、⑤「ものづくり・木工」コース(約4年目)、⑥「カメラで表現」コース(1年目)の講座である。

その「プログラム改良の視点(改良の処方箋)」としては、①3年以上の講座の発展と改良の視点、②学んだ・学習した成果を地域に還元、③社会参加のプログラムを1コマでも入れてみる、④市民のニーズに合った講座を新規に立ち上げ公募する、⑤講座修了者で「自主学習グループ」を組織化できないか等を提言した。

4) 第4回は、演習として「市民ニーズを捉えたプログラム新規開発、②(市民講座プログラム企画作成)を掲げ、次年度講座の講座企画に役立つ企画の改良と新規開発(グループワーク)した。

まず、「前回の振り返り」として、①さらなる・・・改善・修正はないか、②点検項目(・開催時間は、・実施季節は、・講師は、・出前講義の活用は、古賀市民の活用は、古賀の宝の活用は、場所は、内容は)の視点で点検した。

次に、「市民のニーズに合った講座を新規に立ち上げ・・・公募する」では、「新しい講座の企画の視点」として、①既存の講座のチェックの視点として、理念的には、住民のニーズに合っているか、時代のニーズに合っているか、具体的には参加者は多いか、参加者は満足しているか、改善点はないか、廃止すべきか、等を提示した。②新規講座企画立案の視点として、理念的には、コンセプトとして、市民は今、何を求めているか、市民は何を学びたいか、市民に必要な学習は何か、市民に学んでもらいたい学習は何か、市民に知らせたいものは何か、さらに、現代的必要課題として、今、必要とされているのは何か、古賀市の重点施策は何か(市民は知っているか)等がもとめられる。さらに、現実味を帯びて検討が必要なのは、具体的に講座に人は集まるのか、どんな講座なら、人が集まるかの視点からの講座開発が求められるのである。

また、市民のニーズ調査の方法としては、①古賀市の市民意識調査の活用、②インタビューによる活用、③国・県、民間等の他機関の講座調査の活用(講座を市民に聴かせたい、受けさせたいのか等)があることを提言した。演習での成果は表-2である。

5) 第5回は、講義では、「学びを地域に活かす活動とは」のテーマで、自主運営に向けて、自主運営・NPO化への展望を論じた。また、インタビューダイアログでは、「楽しく！地域活動への挑戦」として、市民講座ボランティアの活動の可能性を協議考察した。

5. 市民講座プログラム開発・改革の視点 —実践からの考察—

講座開発・改革をスタッフによる実践から考察したい。今年の講座の新しい視点を振り返り、「学習成果を地域へ還元する」とした³⁾⁴⁾。

1) 3年・4年目の継続している講座の改善の視点

(表-2参照)

表-2 コスモス講座点検

親父の食と調理コース 20年度反省		
①	自己紹介・ミニ栄養講話・基礎調理	時間がなく、下ごしらえを各々でやることができない
②	ミニ栄養講話と調理	
③	陶芸教室	自分で作りたいものを作る楽しさがあってよかった(福津市) 閉鎖的で風景
④	ミニ栄養講話と調理	
⑤	交流調理(自主)	講師不在で、各自が1班(3~4人)1品作り 自分たちで作ったものを施設等へ持って行って食べてもらう? (菓子等) 総勢41名という人数が多少多すぎた感じがある
⑥	ウインナー作り	
⑦	パン作り	
⑧	ミニ栄養講話と調理	各自で下ごしらえからできるようにしたほうがよい
⑨	ミニ栄養講話と調理	家庭で料理をあまりやってない人がいる。家に帰ってもできるよ うに
⑩	ミニ栄養講話と調理	
	自主開催	
	修了パーティ	
21年度案「生活しま専科(案)」		
①	5月 味噌作り(2, 3回)	
②	6月 梅雨時の暮らし方	
③	7月 地ビール作り	
④	8月 ソーメン蔵し	
⑤	9月 陶芸	
⑥	10月 古賀の郷土料理・地産地消	
⑦	11月 ウインナー作り	
⑧	12月 大掃除(施設)	
⑨		
⑩		

古賀と地域を知るコース 20年度反省		
①	清瀬寺	・初心者と複数回参加者との意識の差をどう捉めるか? ・人数が多く、バスの手配が大変だった(1台27人) ・隣町と行く場所が一致すればいいが ・図書館と歴史講座との合体か? 個別で連携するか? →経路行政界(似た講座が多い) ・市外の施設がもっとあったらいいが ・社会、地域への貢献、還元がない ボランティア活動・学んだ分 ・ゆっくり弁当を食べるのもいいのでは ・コース内の交流(異業生間)がない ・市民講座予算の関係で謝礼が制限されていた ・スポットが1名参加で少なかった
②	歴史講座 (飯古温泉)	
③	千鳥苑・児童センター・千鳥ヶ池公園	
④	海水炭水化センター (市外)	
⑤	市議会傍聴	
⑥	千年家仙(新宮町)	
⑦	若宮八幡稲宮堂・川原・天神	
⑧	郷土料理	
⑨	歴史(講義)	
⑩	自然環境(講義)	
21年度プログラム案		
①	5月 青柳宿 (街道)	・すでに行った史跡と新規の場所を交える ・公共交通機関も考える ・弁当付の遠距離も1年に1回は計画する ・講義を生かす史跡、場所に行く ・他の講座との連携も考えてみる

		・市外を2～3回入れる ・各自ビニール袋を持ち、美化に協力する(山、海、施設周辺) ・文楽会も検討する(反省会希望) ・講師で選定で(謝礼?) ・スポットの選定を考慮 ・市議会傍聴 ・保険に入るか(1日分) ・実習費を決める(再検討)	
②	6月 市内施設		
③	7月 市内施設 (バス)		
④	8月 隣町		
⑤	9月 市議会傍聴		
⑥	10月 市外史跡 (バス)		
⑦	11月 市内史跡		
⑧	12月 郷土料理		
⑨	1月 隣町		
⑩	2月 現場(文楽会) (バス)		

講座への参加者がいて講座が継続していることは、評価の高い講座の一つである。次のステップとして、継続している学習者の「学んだ・学習した成果」を地域に還元する視点が大事である。その最初の段階として、社会参加のプログラムを1コマでも入れてみることも一つの手法である。

2) 市民のニーズに合った講座を新規に立ち上げ・公募する

講座の開発には、市民は今、何を求めているか、何を学びたいか、市民に必要な学習は何か、さらに、現代的必要課題として、今、必要とされている学習は何か、古賀市の重点施策は何か(市民は知っているか)等がもとめられる。(※新規事業を企画立案の視点：第4回を注目・参照する)

3) 講座修了者で「自主学習グループ」として組織化できないか

学習者が自主運営講座へと発展する視点である。そのためには、①実費徴収する方式で講座開発する。さらに、②NPO法人として発展させ、学習グループが経営体として発展方式である。

4) 自主運営に向けて

さらに、自主運営グループに発展するにはグループ運営が重要である。その、学習グループの運営には、①共通目的の確保、②活動内容の工夫、③指導内容の広がり・工夫、④役割分担と参加しやすい運営、⑤メンバーの確保への工夫、⑥「目的達成機能」と「集団維持機能」とのバランス・工夫が求められる。

5) 学習成果を「公共」へ還元の雰囲気づくり

また、学習者の「承認の喜び」、「自己表現・自己実現の喜び」を満ちし、生き甲斐づくりに結びつくには、学びの成果を「公共」へ還元の雰囲気づくりが大事である。さらに学習の成果を「公共」から「地域への還元」・「地域社会貢献」・「ボランティア」と発展

させることが求められる。「学習社会」から「ボランティア社会」への移行である。そのためには、学習の仲間と楽しく、自己向上・自己表現し、地域のために生かす・活用の視点を忘れてはならない。

6) 楽しく地域活動への挑戦

地域での学習活動は、楽しいことが第一である。楽しくないと継続しない。そこで、楽しい学習の機会づくりは、楽しい場づくり、居場所づくりである。次に、財政の確保(会費、補助金、事業ごとの広告・スポンサー探し、共催・協賛・後援・協力)等である。さらに、新しい時代は、情報発信・情報収集、インターネットの確保等が大事であり、楽しく地域活動へ発展することが求められる。

6. おわりに

本論は、学習の成果を積み上げた、市民スタッフによる市民講座開発・改革の実証的な実践研究の過程である。改めて今、感じることは、地域には学習を積み上げた素晴らしい人々がいる、すなわち「公共」を担う人材は存在し、その人材育成と活用も可能であるということである。そして、これらの人たちは開発の手法を身につけると格段のプログラム開発を行うのである。それは、学習の実践者であり、人生の生き抜くノウハウを培ってきた人たちならではのすばらしさである。すなわち、この人たちの活用は求められており、プログラム開発は可能であることである。その、市民スタッフ養成のプログラムを提供できたので、参考にして頂きたい。さらに、このプログラム自身も改善の余地があり、改良を積み重ねていきたい。

参考文献

- 1) 平成20年度「古賀市コスモス市民講座」開催要項。
- 2) 平成20年度「コスモス市民講座スタッフ養成講座」開催要項。
- 3) 古市勝也「法改正と新たな生涯学習の推進に挑戦する地域」『日本生涯教育学会年報29号』、日本生涯教育学会、2008(平成20)年11月、pp39-56。
- 4) 古市勝也、ブストス・ナサリオ、横尾勝博、力丸宏昭、村山隆一「インターバル方式の日程による『古賀市地域プラン』の開発と実践 ―地域実践を課した古賀市における区長レベルの人材養成―」九州共立大学スポーツ学部研究紀要第2号 2008、pp39-47、2008(平成20)年3月31日。